

文書館だより

ふみくら

文庫

第7号

2006年1月10日発行

藤沢市文書館
Fujisawa city archives

〒251-0054 藤沢市朝日町12-6

電話 0466(24)0171 FAX 0466(24)0172

URL <http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>



芥川龍之介が小学生のときに編集した『日ノ出海』表紙および龍之介自筆稿「日の出海」

この史料の作者は、近代日本を代表する作家である芥川龍之介(1892～1927)です。芥川龍之介といえば、「蜘蛛の糸」や「杜子春」などの多くの短編小説が有名で、国語教科書などを通じてその名前をご存じの方も多いでしょう。その龍之介が、江東小学校(現・両国小)高等科に在学中であった明治36年(1903)4月20日に、友人たちと発行した回覧雑誌『日の出界』の創立1周年を記念して刊行されたものの表紙と、そこに掲載された龍之介自身の作品「日の出海」の最初の部分を見開きで示したものです。(注)この号だけ表紙に「海」の字が使用されている理由は現在のところわかりません。

回覧雑誌とは、文学好きな仲間が原稿を持ち寄り、1冊に綴じ回覧して読んでもらう雑誌で、明治から大正期に文学少年の間で流行したものです。龍之介も高等科在学中の10～11歳にかけて、『日の出界』の主筆兼編集人となり、級友からの寄稿のほとんどを自ら清書するばかりでなく、各作品について誤字や言葉遣いを直したり、批評を記しており、カットなども描いています。(注)この表紙の絵は龍之介の養父・芥川道章の筆によるとされています。また龍之介は、

本名(当時の自署名は「龍之助」)の他に、「溪水」「龍雨」「RA生」「RA太郎」などのペンネームも用いています。

これら『日の出界』は、山梨県立文学館にまとまった2冊と断片数枚、日本近代文学館に断片9枚が所蔵されていますが、藤沢市文書館にもこの『日ノ出海』の他に、『日の出界臨時発行お伽一束』という表紙付の冊子および未綴り断片3枚が所蔵されています。当館で所蔵している芥川龍之介関係資料は、市内の鶴沼海岸に長年お住まいだった、文芸評論家の故・葛巻義敏氏(1909～85)の妹の故・葛巻左登子氏(1910～99)から、平成8年(1996)にその他の関係資料と一括して寄贈されたものです。これらの資料群には、龍之介自筆資料約560点を含む約1500点の資料があります。

当館では、龍之介自筆資料を含むこれらの資料群を「葛巻文庫」とし、これまで整理を行ってまいりました。そして関係資料目録を、今年3月までに刊行する予定です。

なお、「葛巻文庫」の由来や内容などについては、次のページをご参照ください。(中村)

* 目次 *

- 芥川龍之介が小学生のときに編集した『日ノ出海』の表紙および龍之介自筆稿「日の出海」..... 1
- 藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」について..... 2
- 連載「藤沢山日鑑茶話」第5回..... 3
- 連載「古文書の読み方」第7回 ■ 「ミニ展示」のお知らせ..... 4

藤沢市文書館所蔵「葛巻（くずまき）文庫」について

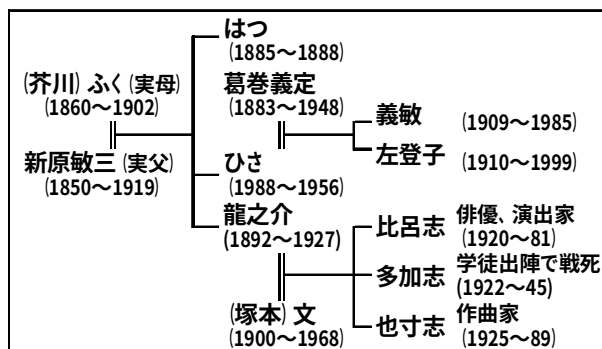
葛巻義敏氏は、芥川龍之介の次姉・新原ひさと獣医であった葛巻義定の長男として明治42年(1909)に東京で生まれました。彼は、大正12年(1923)に東京高等師範附属中学校(現・筑波大学附属中学校)を中退した後で、武者小路実篤(1885～1976)が主催する「新しき村」にいくことを決意しますが、実篤の説得などにより断念し、龍之介の書生として活動するようになります。そして龍之介の自殺後、葛巻氏は龍之介の遺言により岩波書店から最初に刊行された『芥川龍之介全集』(元版全集)編集に小島政次郎(1894～1994)や堀辰雄(1904～53)らとともに関与する一方で、大祖母であった芥川ふき(1856～1938)の協力などにより、龍之介の遺稿などを管理しました。

戦後、葛巻氏は、龍之介の実像を世に伝えるべく、龍之介の未定稿を多数収めた『芥川龍之介未定稿集』を昭和43年(1968)に出版しました。その間、葛巻氏は散逸させないことを条件に、原稿類などを古書店「三茶書房」の店主・岩森亀一氏(山梨県出身)に有償で譲渡しました。その岩森氏が山梨県立文学館に寄贈したのが、「岩森亀一コレクション」です。また葛巻氏は、日本近代文学館にも自殺直前に龍之介が描いたとされる「娑婆を逃れる河童」などを寄贈しています。

葛巻氏は、『芥川龍之介未定稿集』を刊行した直後、当時世田谷にあった自宅が火災にみまわれるという災難に遭遇されました。その際、残りの龍之介関係資料もほとんどが焼失したのではないかと言われてきました。しかし、損傷を受けてはいるものの、「幻の雑誌」とされてきた小学校時代の回覧雑誌『日ノ出海』や、龍之介手持ちの手帳などが残されていました。それらが、妹の左登子氏から平成8年(1996)に文書館に一括して寄贈されたのです。

寄贈された資料の中には、火災による焼損や破損などがひどい状態のものもありました。しかし、可能な限りの修復を施したことで、多くの資料が閲覧可能になりました。それらの中には、龍之介手持ちの手帳のように、最新版の『芥川龍之介全集』(岩波書店)で初めて紹介された箇所を含むものもあります。

また、「葛巻文庫」では、龍之介自筆資料の他、以下のような資料があります。



芥川家関係資料 龍之介の長男・比呂志が慶應義塾大学在学中にかかわった、演劇研究会の講演プログラムや案内チラシ、比呂志自身による台詞が書き込まれた演劇の写真などがあります。また、次男・多加志が子供の頃描いたと思われる魚たちの絵や、彼が戦死したビルマ(現・ミャンマー)から叔母のひさに当てた最後のハガキなどがあります。

新原家関係資料 龍之介の実父・新原敏三は、渋沢栄一(1840～1931)が経営に関与していた、牛乳店「耕牧舎」の牧場支配人でした。この「耕牧舎」関連資料として、経営規則草案と見られる記録や、渋沢栄一などにあてた耕牧舎移転に関する具申書の控などがあります。また、明治28年(1895)頃に龍之介の実母ふくが記した日記と見られる記録があります。

葛巻家関係資料 葛巻氏の父義定と母ひさによる記録類が主です。義定の関係資料は、陸軍獣医関係記録や北海道で記された日記などがあります。その中には義定が伝染病研究所時代の明治36年(1903)頃に指導を受けた、細菌学者北里柴三郎(1852～1931)の自筆サインなどが見られます。また、ひさの関係資料では、戦前・戦中期の日記などがあります。なお、葛巻義敏氏関係でも、文学者からの手紙などがあります。

左下に掲載した「年賀状」は、近代日本を代表する詩人で、「日本のランボー」とも呼ばれる中原中也(1907～1937)から、龍之介宅(滝野川区田端435)で遺稿類を整理していた葛巻義敏氏にあてて、昭和11年(1936)元旦に出されたものです。中原は、「汚れつちまつた悲しみに…」【第1詩集『山羊の歌』(昭和9年(1934)刊行)に所収】などで知られています。ちなみに葛巻氏と中原は、ともに東京にある語学学校のアテネ・フランセに通ったことがあり、その縁もあって親交を結んだものと思われます。(中村)

なお、中原中也について詳しくお知りになりたい方は、中原中也記念館(山口市湯田温泉1-11-21)のホームページをご参照ください。

<http://www.chuyakan.jp/00top/01main.html>

← 中原中也からの年賀状





藤沢で使われた徳利
(近代のもの)

藤沢山日鑑には、遊行寺に献上されるお酒や飲酒など、お酒にかかわる記述も見られます。お酒をさす僧侶の隠語としては「般若湯(はんにゃとう)」がよく知られていますが、「唐茶(とうちゃ)」といういい方もあります。日鑑では「唐茶」が主に使われています。

献上品としてのお酒

献上品としてのお酒には、「不老延命酒」「長命酒」「保命酒」「養老酒」などの薬酒があげられます。

これらは味醂(みりん)に薬草を加えたもので(国語大辞典)、「徳利」「曲」(曲物カ)などで献上されています。珍しいものでは、正徳元年(1711)9月20日には、山形光明寺の関係者が「阿蘭陀荒木」を持参しました。荒木、つまりアラキはオランダ渡来のお酒で、アルコールに香気をつけたもの、あるいは薬草を焼酎につけたものとされます(同上)。

そのほかの献上酒は、あまざけ(「甘酒」「醴')が多く、また「蜜柑酎」「梅酒」といった果実酒や、「味醂」「三年酒」「あわ盛」といったものもみられます。単なる「酒」というのは少ないのですが、「酒切手」という、今でいうビール券のようなものもみられます。

ちなみに値段はというと、「江戸買物独案内」(文政7年(1824)序)という本に、蔵前の酒屋での1升当たりの価格が記されています。普通のお酒は180~350文、不老酒4匁、保命酒・蜜柑酒5匁、養老酒7匁5分、梅酒8匁、薩州あわもり金100疋などとなっています(1匁=約110文、金100疋=1700文、1文=約6円、ただし文の換算は同年の日鑑記事、円の換算は諸説ありますが、米1升あたり124文※を、米1升=1.5kgあたり750円(現在)で換算、※シーボルトの調査した「1826年江戸の価格付き主要食物リスト」『ヴェスタ』27/味の素食文化センター/1997年より)。

飲酒の機会

まずは来客へお酒を出すことや、宴席を設けて招待することがあります。年頭に来る「三河万歳(みかわまんざい)」や江の島の岩本院などの使僧、諏訪明神の祭礼のために来る鶴岡八幡宮の社人たち、施餓鬼(せがき)に来る大名家の家臣、年貢勘定など寺の公用で来る村役人などへも、みな酒が供されています。また正月の「御庫裏下り(おくりくだり)」という行事では、村役人や檀家などを招き、宴席がひらかれています。

僧や山内の人たちにも、お酒が振舞われることがあります。正月の屠蘇(とそ)酒、3月節句の白酒といった行事のもののほか、9月25日の熊野権現の祭礼後には神酒が下げられ、年末の煤払いの後

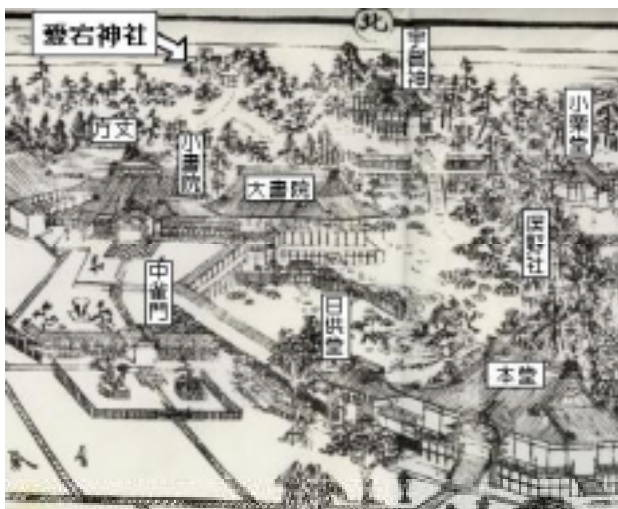
にもお酒が出されます。

天保12年(1841)10月25日には、山内の興徳院という役職の僧から、お酒や煮しめ、そばなどが振舞われ、みな満腹で「生酔(なまえい)」になり、誰もご機嫌で喜んだ、とあります。

愛宕精進 こうした公的な飲酒の機会にかぎらず、山内でしょっちゅう誰かしら飲んでいたと思われる節があります。その理由のひとつは、11月の「加行(けぎょう)」という修行の間には、煙草・酒・外出の禁止令が出されていることです。

もうひとつ「一山惣禁酒」の日もあります。毎年1月と12月の24日に、火難除けのために、寺をあげて禁酒をするというものです。一般には「愛宕精進(あたごしょうじん)」といわれ、火伏の神である愛宕神社に、縁日の24日に酒断ちの精進をして加護を祈るものです。遊行寺では、火災のシーズンの12月と1月にかぎって行っており、これは今でも続けられています。

この行事が始められたのは、そう古い事ではありません。遊行寺では何度か火災があり、天保2年(1831)12月27日には境内の諸堂をことごとく焼失しました。その後一如上人(藤沢39世)によってこの行事が始められたのです。天保14年に最初の記事が見られます。



相州 藤沢山遊行寺 境内諸堂社署繪図
(部分に加工)

建物名表記はよく使われる名称になおしました

話が横道にそれましたが、裏をかえせば、すくなくとも江戸後期には、あらためて禁酒日を設ける必要があるほど、お酒を飲む機会があったといえるでしょう。

お酒がらみの失敗もあり、寛政3年(1791)11月24日夜、塔頭の僧が法事でよばれた酒に酔い、番寮(今の寺務所)で「高声雑談」をしたので、7日間の謹慎を命じられました。数日後には、法事などで酒を呑みすぎないように、みなに通達されました。少々きびしい気もしますが、僧侶なので仕方ないのかもしれませんが、でも私たちも気をつけたいものですね。(酒井)



【問題】

今回も宗門改制度に関わる史料を掲げます。前回は「人別送手形」でしたが、今回はそれとは逆に人別を受けとった村名主が、確かに人別

を受取り、宗門人別帳に加帳したことを証明するため、人別を送ってきた村名主宛てに出した受取書です。(石井)

★ミニ展示のお知らせ★

文書館では1階のロビーにて、ミニ展示を開催しております(展示期間は最長3か月間ほどです)。これまで文書館に収蔵された資料から特徴的な文書を選び出し、展示しています。今までは、社会主義者の荒畑寒村に関する資料(彼の受賞した「朝日賞」のレリーフなど)や、地元の民俗学者であった丸山久子氏の手許に残された、柳田國男関係書簡などを展示してきました。昨年は、昭和初期に鵜沼海岸に設置された鉄道省「海の家」についての関係資料や、関東大震災について記された地元の農民が書いた日記を紹介しました。そして、昨年末は戦後60年というこ

ともあり、「戦時下の藤沢」というタイトルで、文書館に残る戦時中の行政文書の複製を展示いたしました。

今回は、「葛巻文庫」の中でも、芥川龍之介の小学校時代の回覧雑誌『日の世界』の表紙およびその中に収められた龍之介の作品をパネルで3月末まで展示します(途中展示替えあり)。本号1ページでも触れましたが、龍之介はこの回覧雑誌を「主筆」として積極的に編集していました。後年彼は多くの優れた作品を残すこととなりますが、この雑誌こそは龍之介の作家活動の原点だったのです。(中村)

◇◇ 編集後記 ◇◇ ■新年明けましておめでとうございます。■昨秋の収蔵資料展「震災～戦後復興期の藤沢」には多くの方々にご来館いただきましてありがとうございます。■当館では、平日の開館時間帯にいつでも、皆様からのいろいろなご質問にお答えしています。■ま

た、当館の市民資料室では、郷土資料・参考図書・各種の地図類などの閲覧ができるほか、行政刊行物の販売もしております。どうぞお気軽にお立ち寄りください。■この文書館だより「文庫」は、市役所のホームページから入ってバックナンバーをご覧いただけます。(山田)